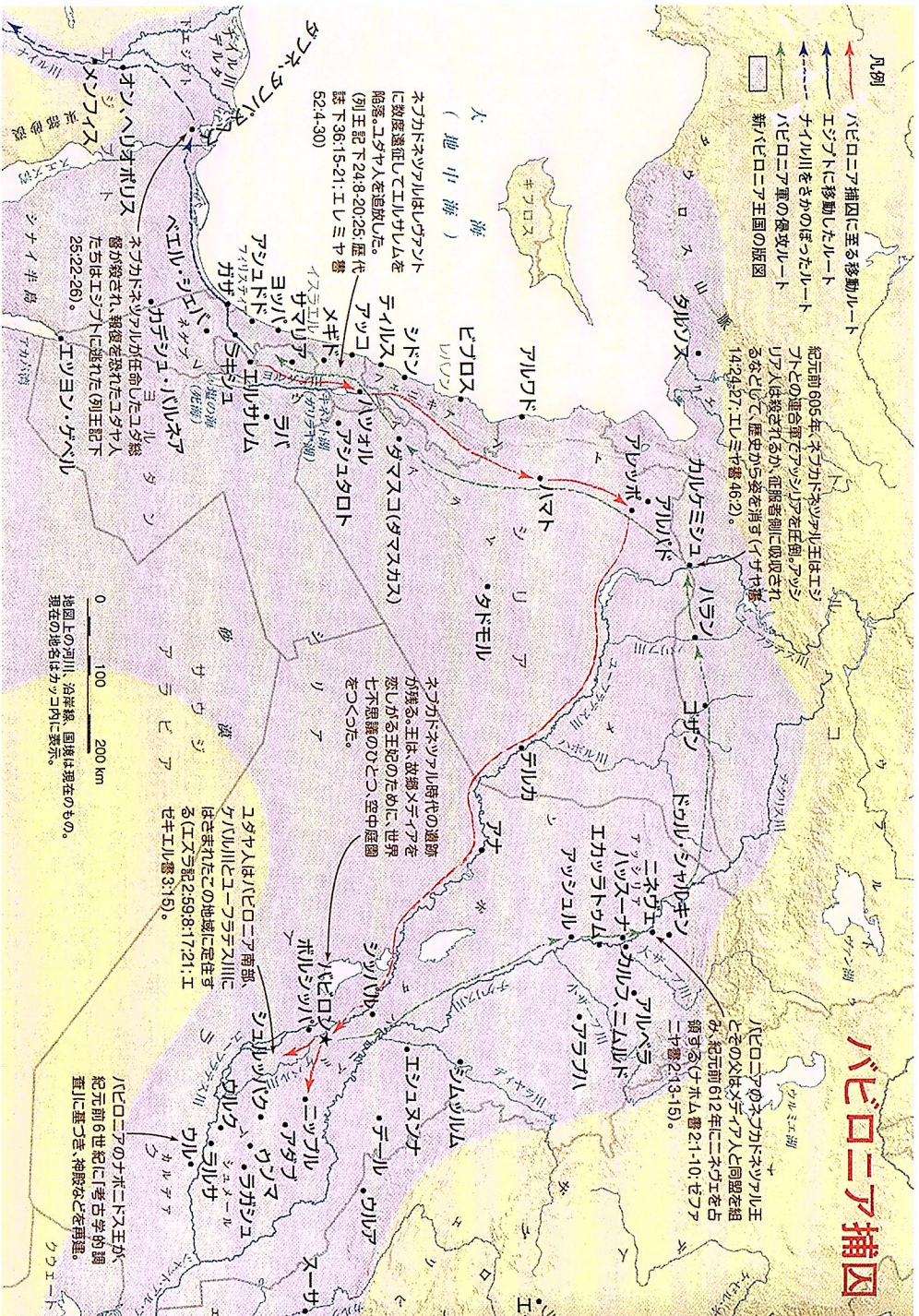


降臨日 (12月25日の聖書箇所)

I 第一朗読 (イザヤ52章7-10節)

- 7 いかにも美しいことか  
山々を行き巡り、良い知らせを伝える者の足は。  
彼は平和を告げ、恵みの良い知らせを伝え  
救いを告げ  
あなたの神は王となられた、と  
シオンに向かって呼ばれる。
- 8 その声に、あなたの見張りは声をあげ  
皆共に、喜び歌う。彼らは目の当たりに見る  
主がシオンに帰られるのを。
- 9 歓声をあげ、共に喜び歌え、エルサレムの廃虚よ。  
主はその民を慰め、エルサレムを贖われた。
- 10 主は聖なる御腕の力を  
国々の民の目にあらわにされた。  
地の果てまで、すべての人が  
わたしたちの神の救いを仰ぐ。

- 7 なんと美しい上で 山々の 両足は 伝令の  
聞かせる者の 平和を  
伝える者の 良さを  
聞かせる者の 救いを  
言う者の シオンに対して 「王となる あなたの神が」  
8 声  
あなたの見張りたち 上げる 声を  
一緒に 喜びの声を上げる  
まことに 目で 目の中で  
彼らを見る 帰ることを YHWHが シオンに  
9 喜びなさい  
喜びの声を上げなさい、一緒に 荒れた所よ エルサレムの  
まことに 慰める YHWHが その民を  
親戚として振舞う エルサレムに  
10 あらわにする YHWHは を腕 その聖の  
目の前に すべての 民の  
そして見る すべての 果てが 地の 救いを 我々の神の



Ⅱ第二朗読 (ヘブライ人への手紙 1章 1-12節)

1 神は、かつて預言者たちによって、多くのかたちで、また多くのしかたで先祖に語られたが、  
 2 この終わりの時代には、御子によってわたしたちに語られました。神は、この御子を万物の相続者と定め、また、御子によって世界を創造されました。3 御子は、神の栄光の反映であり、神の本質の完全な現れであつて、万物を御自分の力ある言葉によって支えておられますが、人々の罪を清められた後、天の高い所におられる大いなる方の右の座にお着きになりました。4 御子は、天使たちより優れた者となられました。天使たちの名より優れた名を受け継がれたからです。  
 5 いったい神は、かつて天使のだれに、  
 「あなたはわたしの子、  
 わたしは今日、あなたを産んだ」  
 と言われ、更にまた、  
 「わたしは彼の父となり、  
 彼はわたしの子となる」  
 と言われたでしょうか。6 更にまた、神はその長子をこの世界に送るとき、  
 「神の天使たちは皆、彼を礼拝せよ」  
 と言われました。

1-4節の逐語的な訳

- 1 徐々に そして 多くの方法で  
 古くから 神は 語つて 父祖たちに 中で―預言者たちの
- 2 上に―終わりの 日々の これらの 語つた 我々に 中で―子の、  
 ところの方を 彼が立てた 相続者に すべてのもので、  
 通して―ところの方を そして 彼は造つた 世を
- 3 ところの方は でありつつ 発光 栄光の そして 刻印 実体の 彼の、  
 担いつつ また すべてのもので 言葉で 力の 彼の、  
 清めを 罪の 行つて
- 4 それほどに よりよく なつて 天使たちより  
 ほどに よりすぐれた より―彼ら 彼が相続した 名を。

① 1-4節は文法的にはひとつながりの文章になっている。構造を確認しておく、二重線をつけた「神は：語つた」が主語と動詞である。この「語つた」に点線で示した分詞形「語つて」が修飾している。したがって、1-2節一行目の「神は：語つて、：語つた」が主文章となり、2節二行目から4節は傍線で示した三つの関係代名詞に導かれた関係代名詞文である。

1-2節一行目の主文章「神は：語つて、：語つた」であるが、神の語りかけが二つの時代に分けて語られている。1節では「古くからの、預言者たちの中での、父祖たちへの」神の語りかけが描かれ、2節一行目では「これらの日々の終わりに、子の中で、我々」への神の語りかけが述べられる。「語つて：語つた」というようにどちらにも同じ神の語りかけであり、啓示であるが、決定的な相違もある。その相違とは、我々への語りかけは「子の中で」行われており、以前の語りかけのように「徐々にそして多くの方法で」行われずに、一気に決定的な仕方

で語りかけられていることである。  
 そこで2節二行目から4節にかけて、この「御子」がどのような方であるかが語られる。最初の二つの関係代名詞文では、「神」が主語であるから、神が「御子に」行ったこと、また「御子を通して」行ったことを描いている。神は御子を「すべてのものの相続者」とし、「御子を通して」神は世を造つた。したがって、御子との関わりを欠くなら、すべてのものはその存在を十分に保つことができない。三番目の関係代名詞文(3-4節)では、主語が「御子」に代わり、動詞は点線で示した「着座した」である。その前後の、点線をつけた四つの分詞形はいず

れも「御子は着座した」にかかっている。この分詞形のうち最初の三つの分詞形は受肉から昇天までのキリストを描き（3節）、最後の分詞形は神の右に着座した御子の現在の様子を描いている（4節）。御子は天使たちより「すぐれた名」を相続したので、彼らよりも「いつそうよい」ものとなっている。キリストは預言者のひとりでも、天使のひとりでもない。神の「刻印」であり、神の全体像を完全に表すものなのであり、キリストは神を完全に啓示する方なのである。こうして、5節以降の旧約引用に入って行く。

### Ⅲ福音（ヨハネ1章1―14節）

1 初めに言があった。言は神と共にあった。言は神であった。2 この言は、初めに神と共にあった。3 万物は言によって成った。成ったもので、言によらずに成ったものは何一つなかった。4 言の内に命があった。命は人間を照らす光であった。5 光は暗闇の中で輝いている。暗闇は光を理解しなかった。

6 神から遣わされた一人の人がいた。その名はヨハネである。7 彼は証しをするために来た。光について証しをするため、また、すべての人が彼によって信じるようになるためである。8 彼は光ではなく、光について証しをするために来た。9 その光は、まことの光で、世に来てすべての人を照らすのである。10 言は世にあった。世は言によって成ったが、世は言を認めなかった。11 言は、自分の民のところへ来たが、民は受け入れなかった。12 しかし、言は、自分を受け入れた人、その名を信じる人々には神の子となる資格を与えた。13 この人々は、血によってではなく、肉の欲によってではなく、人の欲によってでもなく、神によって生まれたのである。

14 言は肉となって、わたしたちの間に宿られた。わたしたちはその栄光を見た。それは父の独り子としての栄光であって、恵みと真理とに満ちていた。15 ヨハネは、この方について証しをし、声を張り上げて言った。『わたしの後から来られる方は、わたしより優れている。わたしよりも先におられたからである』とわたしが言ったのは、この方のことである。16 わたしたちは皆、この方の満ちあふれる豊かさの中から、恵みの上に、更に恵みを受けた。17 律法はモーセを通して与えられたが、恵みと真理はイエス・キリストを通して現れたからである。18 いまだかつて、神を見た者はいない。父のふところにいる独り子である神、この方が神を示されたのである。

#### 逐語的な訳

- 1 初めに あった 言が
- そして言は あった 神のもとに
- そして神で あった 言は。
- 2 彼は あった 初めに 神のもとに。
- すべてが 彼を通して 起こった
- そして 彼を離れて 起こらなかった なにひとつ
- 起こったところの、
- 4 彼の中に いのちが あった
- そして いのちは あった 人々の光で。
- 5 そして 光は 闇の中に 輝いている
- そして 闇は それを 理解しなかった。
- 6 起こった 人が
- 遣わされた者が 神から
- 彼の名は ヨハネ。
- 7 彼は来た 証しのために
- ようにと 彼が証しする 光について
- ようにと すべての人が 信じる 彼を通して。
- 8 なかった この者は 光で

そうではなくようにと 彼が証しする 光について。

9 あった ほんとうの光が  
ところの 照らす すべての人を  
来て 世の中へ。

10 世の中に 彼はあつた

そして 世は 彼を通して 起こった

そして 世は 彼を 認めなかった。

11 自分のものの中へ 彼は来た

そして 自分のものは 彼を 受け入れなかった。

12 だが彼を受け取った人々に

彼は与えた 彼らに 神の子となるための権威を

信じる者たちに 彼の名を。

13 彼らは 血からではない

肉の想いからでもない 人の想いからでもない

そうではなく 神から 生まれた。

【初めに言があつた(1—5節)】 1節に使われた名詞を語順どおりに追うと、「言↓神↓神  
↓言」となる。しかも、1—2節はキアズモの形を取っている。

初めに あつた 言が

言は あつた 神のもとに

神で あつた 言は。

彼は あつた 初めに …。

このような荘嚴な言い回しを用いることによって、言と神の密接な関係が強調される。

【証しをする者(6—8節)】 この段落では視点が地上に移り、洗者ヨハネの姿が描かれる。  
ここでは「証し」と「証しする」が合計三度繰り返されている。洗者ヨハネは光そのものな  
ではなく、光を「証しする」ために来た。

【まことの光(9—13節)】 この段落では「世」が四回繰り返されている。ここで言と世との  
関わりがテーマとなっている。言にとつて、世は「自分のもの」であるが、しかし世は言を認  
めず、受け入れなかった。しかし、言を「受け取った者」は「神から生まれた」者であり、新  
たな創造にあずかった者である。

【父の懐にいる方(14—18節)】 この段落では「恵み」が四回、「真理」が二回使われている。  
肉となった言は、「父の懐にいる方」であるから、神が「恵みと真理」の方であることを現して  
いる。15節はヨハネの証しに再び触れている。

①今日の福音は、ヨハネ福音書全体の序曲である。この序曲は「ロゴス賛歌」と呼ばれることが  
あるが、神の子であるロゴスの受肉を高らかに歌うこの序曲にふさわしい呼称であろう。

初めに言があつた(1—5節)

この段落は永遠の「言」について述べる。「初めに」「光」といった表現の背景には、創世記  
の創造の記事があるが、いわば宇宙的な広がりの中で、この「言」の力強い働きが描き出され  
る。

1—2節は、動詞「あつた」を4度繰り返すことによつて、この「言」の存在を強調する。  
この「言」は「初めに」「神のもとにあつた」のであり、時間を越えた永遠の存在であると同時  
に、神と密接な交わりの内にある。「言は神」であり、「言」は神と同じ本質を持っている。

しかしこの「言」は、世界との関わりを欠いた抽象的な概念ではない。なぜなら「すべてが  
彼を通して起こった」と言われている。この「言」には、万物を生じさせる無限の躍動する力

が秘められている。さらにそれは、単なる力である以上に「いのち」である。だからこの「言」は、人間と真に関わろうとする神の意志を表すと云ってよい。人間が虚無や絶望や罪といった「闇」に脅かされているときでも、人間を生かそうとする神の意志は働き、その闇を吹き払う。この世は、神が支え、生かす世界である。

証しをする者（6—8節）

ここから舞台は、歴史の中へと移る。ここに登場するヨハネは、神から遣わされて歴史の中でこの「光」を証しする。

まことの光（9—13節）

イエスは受肉し、世に来る。この「言」によって造られた「世」は、「言」に応答する力があるにも関わらず、それを「認めなかつたし」、「受け入れずに」、十字架によって拒絶した。しかし「信じる者」には、「神の子」となる力が与えられる。信じる者は人間の血や欲によらず、「神から」生まれる。「神の子」の誕生は、いわば第二の創造であり、神のみがそれを成し遂げる。

言の受肉（14節）

ここで再び、受肉の出来事に焦点が当てられる。1節で描かれた永遠の「言」が、今や時間の中に現れた。地上的な、時間的な存在である「肉」に、この方は完全になったのである。「宿った」とは、「 TENT を張る」の意味であり、旧約聖書における神の臨在の場である会見の幕屋を連想させる。イエス・キリストは、この地上における神の新たな臨在の場となった。その「栄光」を目撃する「我々」とは、時代を越えた信じる者の群れである。

ヨハネによる証言（15節）

洗者ヨハネの証言については、過去形ではなく現在形で書かれる。それは彼の証しが時代を越えた真理を指し示しているからである。

独り子なる神（16—18節）

「父の懐に在る方」とは、独り子と神との親密さを示す。その独り子によって「恵みと真理は…起こった」。父の懐に在る方が地上に来ることによって、人間は初めて本当の「恵み」と「真理」とを知った。こうして、見ることでできない神が、この地上に現された。独り子の受肉によって、人はまことの神がどのような方であるかを知る道が開かれたのである。

②今日の福音のまとめ

福音書記者ヨハネが、この福音書を天地創造の場面から始めたのは、神の救済の意志が創造の初めから今に至るまで変わらないことを示すためである。その神の救済の意志を告げる永遠の「言」が、時間の中に、この地上に現れた。だからこの方において、人は神が恵みと真理の方であり、人間を救う方であることを知る。地上にくだった「言」は、やがて十字架において神の恵みと真理を告げる。

③今日の福音の言葉から（言・ロゴス）

言葉を表す名詞にはロゴスのほかに、グローツサとレーマがある。グローツサは「舌」が原義であり、それぞれの民族に固有の「言語」を意味する（黙五9など）。レーマは出来事となる言葉であり、出来事のうちに響いている言葉を表す（ルカ一37など）。これに対して、ロゴスは物事や思考に秩序を与え、他人との意志疎通の道具となる言葉、また文章・手紙・本など言葉によって表現されたものを表す。ロゴスは新約聖書では三三〇回使われ、フィレ・ユダ・2ヨハを除くすべての文書に用例がある。

④「話すこと・話された言葉」としてのロゴス。ロゴスは、「行い」（ルカ二四19）、「知識」

（1コリ一5）、「力」（1コリ四19）、書かれた「手紙」（2テサ二2）と対比される。

イエスにいやしを頼む者は「ひと言」言ってくださいと願ひ（マタ八8）、ファリサイ派

はイエスの反問に「ひと言」も言い返せない(マタ二二46)。イエスは「言葉」で悪霊を追い出す(マタ八16)。使一五27の「言葉によって」は、「口頭で」を意味する。

⑤ ログスはいろいろな形で姿を現す。それは「証言」(マタ五37)、「発言」(ルカ二〇20)、「質問」(マタ二二24)、「祈り」(マタ二六44)、「話」(使一四12)、「励まし」(使一三15)、「呼びかけ」(一コリ二4 a)、「説教」(一テモ五17)、「命令」(ルカ四36)、「手紙」(二テサ三14)、「知らせ・評判・物語・話」(マタ二八15など)、「格言」(ヨハ四37)などである。イエスの教え(ルカ四32)、イエスに属する人々の宣教(ヨハ一七20)、使徒やパウロの宣教の言葉や(使二41など)、特定の発言内容を指すにも(マタ一五12など)、ログスが使われる。しばしば使われる複数形は、イエスや使徒が話す「教え・説教」を意味したり(マタ七24)、「話」の意味でさまざまな人物に使われる(七22など)。

⑥ また、ログスは「話題にされているもの・語られている事柄」の意味で使われる(マコ九10、使八21など)。話された言葉のほかに、書かれた言葉にもログスが使われる。ルカは自分が著した福音書を「第一のログス(第一巻)」と呼ぶ(使一一)。預言書や律法に書かれた言葉(ルカ三4など)、手紙の著者が書きしるす文章もログスであり(ヘブ五11)、手紙そのものも「勧告の言葉」(ヘブ一三22)、「預言の言葉」と呼ばれる(黙二二7など)。

⑦ さらに、ログスは「人の言葉」とは異なる神の啓示としての「神の言葉」を指す(一テサ二13)。神の言葉が意味するのは、神の掟(マコ七13)、神の約束(ロマ九6・9・28)、神の創造の言葉(一テモ四5)、裁きの言葉である(ヘブ四12など)。パウロは十戒や全律法は「隣人を自分のように愛せ」というレビ一九18の「ログス」に要約されると言う(ロマ一三9、ガラ五14)。

⑧ 新約聖書で、「神の言葉」を人にもたらしたのは、まずはキリストである(ヨハ一七14)。その意味で、神の言葉は「わたしの言葉」(マコ八38など)、「キリストの言葉」(コロ三16)、「主の言葉」である(使八25など)。神の言葉は、キリスト者や(フィリ一14など)、使徒によっても語られ(使四29など)、使徒の働きを通して神の言葉が聞き(使一三7)、受け入れる人々が増え(使八14)、神の言葉が広まっていく(使六7など)。これらを含む多くの用例で、神の言葉は「キリスト教の宣教・福音」を意味している(ルカ五1など)。神の言葉は、単に「ログス(御言葉)」と呼ばれたり(マコ二2など)、「御国」(マタ一三19)、「救い」(使一三26)、「和解」(二コリ五19)、「十字架」(一コリ一18)、「義」(ヘブ五13)、「命」(フィリ二16)、「真理」(エフェ一13など)、「恵み」などの属格を伴う(使一四3など)。ルカとパウロは「キリスト教の教え・福音の言葉」の意味で複数形を使い、自分の福音書や手紙を指す語とする(ルカ一4、一テサ四18)。

⑨ そのほかの用法。「ログスを与える・ログスを求める」は、元来は「決算報告をする・求める」を意味する商用表現で(ルカ一六2)、新約聖書では他人へのキリスト者の責任や(一ペト三15)、裁判での弁明(使一九40)、終末の裁きで神に「申し開きを行う・弁明すること」を表すのに使われる(ロマ一四12など)。この商用表現に由来する用法として、ログスは「決算」を意味する(マタ一八23など)。ほかには「説明・理由・道理」(マタ五32など)、「関係」の意味で使われる(ヘブ四13)。

ヨハネ福音書の序文でのログス(言)は、最初に神のもとにあつて、しかも神であり(一節)、すべてのもの(世)がそれによって成り(三・10節)、そのうちに命があり(4節)、世に到来し(10節)、肉となったログスである(14節)。14・17・18節から明らかかなように、このログスはイエスである。ヨハネは肉となったログスであるイエスのうちに見た神の栄光への信仰を言い表す。一ヨハ一1でも、イエスは「命のログス」の名で呼ばれている。